

美しい町並みの裏にある
ソ連崩壊の傷あと

首 都ビシケクに到着したときの第一印象は、「途上国とは思えない」ということ。これまで訪問した国々と比べて、町並みがきれいで、道路も整備されているのです。

キルギスをはじめ、かつてシルクロード沿いに栄えた中央アジアの国々。旧ソ連時代に道路や電力といったインフラがほぼ全土に整備されたので、一見、発展しているように思えます。けれど、1991年の旧ソ連崩壊後に独立を果たした後は、不安定な政治や、度重なる自然災害、農業以外の産業の未発達など、多くの課題が待っていました。

一方、同じカラコルの学校では、キルギス政府の給食改善事業のために、国連世界食糧計画(WFP)が調理設備や研修などを提供し、給食や食育活動のノウハウを指導しています。この日の献立は、

「給食が変わって、とてもおいしくなったの!」とうれしそうに話す子どもたち

知花くららさん

シルクロードを走る

〜キルギスの真の自立に向けて

昨年11月、国連WFP日本大使として、「なんとかしなきや!」プロジェクトメンバーを務める女優の知花くららさんが、キルギスを訪れました。これまで15カ国以上の開発途上国を訪れた知花さんも、中央アジアの国は初めて。総移動距離2000キロ、シルクロードの山々を走り抜ける中で出会った人々の姿をご覧ください。



フェルトのストール作りをお母さんに習う。無心になれて楽しい!

ソバの実と野菜のピラフ、キャベツサラダ、ニンジンパン。焼き立てのパンは、ずっしりしていて、いい香り。

キルギスの学校では、旧ソ連崩壊後、給食が止まってしまいました。復活したものの、最近までは紅茶とパンだけだった給食がこんなに充実したことで、子どもたちの生活態度も良くなったとか。「ちゃんと食べて、勉強して、すてきな大人になってください」と呼び掛けると、子どもたちが笑顔で応えてくれました。

世界に羽ばたく農業へ
強み生かし国際基準に対応

再びビシケクに戻ってお会いしたのは、この国の農業を国際的な産業に育てるために奮闘する方々でした。

齋藤克郎チーフアドバイザーによると、日本で流通する種子の90%は輸入な

のだそうです。キルギスは乾燥した気候や豊富な雪解け水、病害の発生率の低さなどから、野菜種子の生産に向いた国として注目されています。しかし、もともとと遊牧民国家だったこと、独立後に専門家がロシアへ引き上げてしまったことから、同国では青果の栽培・採種技術が欠けているのです。「そこで、2013年から、野菜種子の生産を国際ビジネスに育てる支援をしています」と、齋藤さん。研修室内には、試験栽培によって採種された野菜の種がずらりと並んでいます。

一方、研修員たちを指導する須藤達士専門家は、「彼らはとても熱心です。日本から企業が来るよ、と呼び掛けて、モチベーションを高めています」と話してくれました。関心を持ってくれる企業も、徐々に増えているそうです。

最後に訪れたのは、ビシケク郊外の古い国営牧場。キルギスは昨年8月にユーラシア経済連合(EEU)に加盟したため、食品の流通や輸出にあたっては安全性のEEU規則を守らねばなりません。でも、設備の老朽化や人材不足がたり、搾乳技術の普及や乳牛の病気の検査体制整備が進んでいないのです。そこで、JICAが総合的な計画(乳・乳製品の品質及び安全性検査マスタープラン)作りをサポートすることになりました。

独立前からこの牧場を守ってきたストラーナ・タラチエバタルシエバ牧場長は、「JICAの支援で身に付けた日本の技術をこの国で生かしたいんです」と話してくれました。田中信也専門家は、「プランの実行には、まず、モデル農家への技術移転計画が必要です。その計画は、キルギスの人たち自身の手で作って

もらいたいですね」と、農家の自主性に期待を寄せています。

今回の旅を通して、キルギスの可能性を感じました。人々はエネルギーに満ちていて、この国は自立に向けた最後の段階にあるのだと思います。また、将来のビジネス経営を念頭に置いたJICAの支援も興味深く感じました。「人」を育てる側と、その思いを共有する「人」のがんばりが、本当の自立につながっていくのでしょ。

知花くらら「モデル女優として女性ファッション誌・TV番組などで活躍。また、国連WFP日本大使として「なんとかしなきや!」プロジェクトや国連WFPのウェブサイトでもご紹介しています。

知花くららさんのキルギス訪問の様子は「なんとかしなきや!」プロジェクトや国連WFPのウェブサイトでもご紹介しています。



「輸出のための野菜種子生産振興プロジェクト」の須藤専門家(左)



旧ソ連時代からの老朽化が目立つ牛舎。独立後は政府からの支援が減り、機材や設備の更新が滞っている。衛生面の改善も課題だ